

10章・愛と悲しみ : CHARLIE CHAPLIN (1929-68)

— *Beauty exists in sadness.*

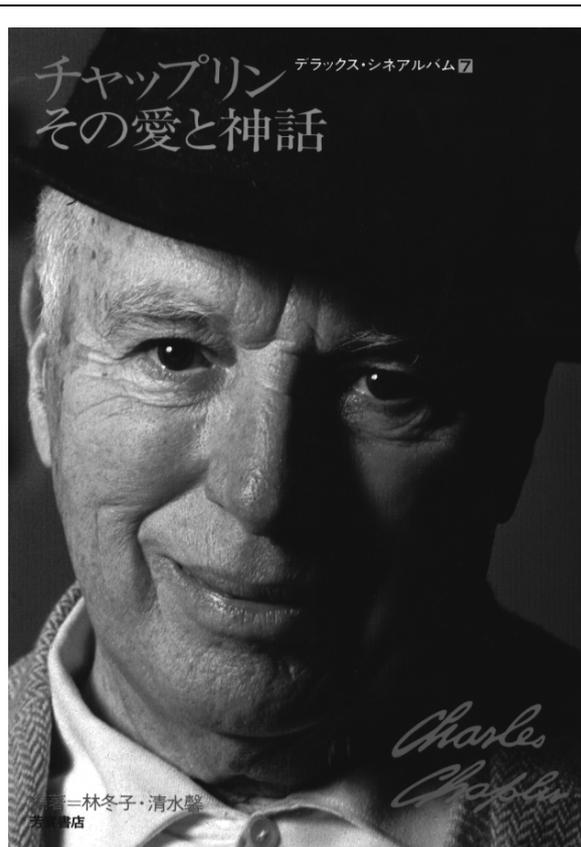
(1) (My) first meeting persons who interested me (in a book or something)

なぜ
何故、チャップリンをテーマに選んだのか。

それは、彼が「よく知られているように、製作・脚本・監督・主演・作曲・編集とひとり六役もこなしながら、なおかつ、……おおよそ考えられる……芸という芸を、すべてひとりでやってのける。……まさにスーパーマンそのけ」(*8: p41) であり、映画史上その頂点に輝いた人物の一人であったからではない。

彼の作品が「平和と人間の自由を奪うものへの怒りと、名もない人々への愛がみなぎって」(*5: はしがき) いると言われているように根底に人間を、特に人への愛を問うているからである。それがチャップリンをテーマに選ぼうと思った理由である。

しかし、英語の授業をして教材にするにはもう一つの条件が必要である。それは(3) My favorite wordsに載せる人を引きつける何らかの関連した英文がなければならない。いかに重要な人物でも、私に関心を持っている人物でも、またMAINテーマの内容を満たしていても(3)の人を引きつける言葉が関連した文章がなければならない。それも英語で存在していなければならないということがもう一つの条件である。幸いに、チャップリンには(3)に載せた独裁者の英文やライムライトなどがあり、そしてそれを入手できたので問題はなかった。そこでチャップリンをテーマに選んだ訳である。



(*8)

などと、1994年度のプリントに、面白くも何ともないつまらぬ書き出しをしてしまった。94年度同様、第I部、第II部に比べ、第III部のMy first meetingの箇所は迫力がでない。9章のキング牧師の箇所で書いたように、授業の場が真剣勝負でなかったからであろうか。95年度は省略したい気は山々なれど、しかし、やはり書かなければならない、と消極的な形で考えていた。

それは、①視聴覚教材が授業に持つ役割を考えるとその出発点であったチャップリンは外せないこと、②そして何よりも授業に“美”を求めるようになっていく上でチャップリンの言葉「美は悲しみの中にあり」も大きなウェイトを占めていること、③最後に短大2期(1988~90年)の無茶苦茶な“授

業の場”の中で、私の授業の歩みを記しておきたかったからである。

しかし、月日が経（た）つにつれ、チャップリンの作品や文章を味わうにつれ、そうした消極的な考えを持ったのはとんでもないことであったと思いつつある。その理由については授業で触れるが、ともかく、このページのチャップリンの写真を見るだけでも私の言わんとすることは幾分か分かるであろう。今後、一定の条件が揃えば、チャップリンについてのより激しい文章を書くつもりでいる。取りあえず、チャップリンとの出会いから書くことにする。

《◇-1：チャップリンとの出会い、そして視聴覚教材について》

チャップリンとの出会いであるが、それは大学のときに^{さかのぼ}遡る。勿論、それ以前に名前は知っていたが興味がなかった。大学（1971-75年）のときにみんながチャップリン、チャップリンと騒ぐのでチャップリンの映画を見に行った。「黄金狂時代」、「キッド」、「街の灯」、「ライムライト」等を見た。「街の灯」の内容、それに「ライムライト」の強く響く幾つかの言葉が印象に残ったが、そのときはそれまでである。

その後教師になり、英語以外の教科で求める日々が始まったときに、映画等の視聴覚教材は重要な教材となるのではないかと常に考えるようになった。だから、女子校の教壇に立ってしばらくして、教育委員会等の所有するフィルム貸出資格を得るため、16 mmフィルムの映写資格免許さえ取りに行ったこともある。だが、対象となる視聴覚教材が余りにも少ないこと及び時間的制約の問題などで活用の仕方^{かた}で大きな困難を感じていた。勿論、後に述べる費用の問題もある。振り返っても、高校の教壇でマザーテレサのビデオだけが比較的うまく活用できたかもしれないというくらいである。

短大で講師になってからも「Miracle Worker（「奇跡の人）」、「ジョニーは戦場へ行った（Johnny Got His Gun）」等幾つかのビデオを上映したが上映したにすぎなかった。英文の資料もなく編集もせずに流したため教材とはなっていなかった。教材としてのビデオを意識し始めたのは、キング牧師のところ^{ところ}で書いた駿台予備学校を退職した翌年の89年度からである。

このとき「誰がために鐘が鳴る（For Whom the Bell Tolls）」なども上映したが、やはり限界があった。しかし、比較的時間が取れたのを生かし、ビデオを編集するなど初めて教材としてビデオ活用したのがチャップリンの映画・「ライムライト（Limelight）」である。

このときは、英文プリントもつくり、はっきりと教材を意識して授業に臨んだ。チャップリンを選んだのは、大学のときにみた「ライムライト」の力強い呼びかけの言葉が視聴覚教材のことを考えているときに^{よみがえ}蘇ったからである。これならば、英語の教材になるのではないかと考えた。ビデオデッキ二台^{そろ}を揃えビデオを何回も見て30分程度に編集した。相当時間がかかった。そして、関連の教材のプリントも作成することができた。当然数日でできるはずはない。しかし、完全にうまくいった訳ではない。つくづく難しいものであると痛感した。

残念ながら、本年使用ビデオの「ライムライト」はこのときのものである。

ともかく、視聴覚教材はどの教科においても——特に英語においては——重要な教材の一つとなることは間違いない。英語の勉強にもなり、そして何よりも英語を覚えてみたい——少なくともこのセリフだけは覚えてみたい——というビデオ等を見つけ、そして一定の時間内に収まるか・収まるように編集

しても内容を失わず、同時に関連英文資料を見つけて活用するなどして、私も含めて英語が十分理解できない者でも内容を把握できるようにするにはどうしたらよいか、という課題を提供したのがチャップリンであった。

95年度にはチャップリンの有名な作品のビデオ11巻を購入し全てを見た。さらに、初期の作品のビデオ10巻も購入し、それらもすべて見てみようかとも考えている。しかし、それでも、まともな、本格的な視聴覚教材は器具の関係もあり、当面はまず作成できないのではないかと考えている。また、そこまでしてもこの10章のMy first meetingはまともな文章は書けないであろう。(その理由は11章か補章-3で述べる)。それでも、チャップリンにこだわるのは、視聴覚教材に取り上げたいということだけではなく、これから述べる「美は悲しみの中にあり」という言葉に、いわば“取り付かれています”からである。

《◇-2：野麦峠^{よみがえ}で蘇った言葉、「美は悲しみの中にあり」》

——チャップリンを取り上げたもう一つの理由——

私が今探している英文の一つに、チャップリンの言葉の「美は悲しみの中にあり」に関する一群の英文がある。チャップリンの原点は(2)に書いたようにpoorの中で、正確にはpoorの中に、より正確にはpoor(貧しいが)故に^{ゆえ}、母の強い愛と母への強い愛にある。これがチャップリンの出発点であると思う。故に、これを強く表した「美は悲しみの中にある」が教材として最適ではないかと考えた。

同時にこの言葉は私が今目指している、授業の転換点となりつつある“美”というものに大きな影響を与えた言葉だからでもある。この言葉は私を強く引きつけると同時に多くの人を引きつけるのではないかとも思っている。

この言葉を意識したのは、89年に野麦峠に行った際に、貧しい中での辰二郎とミネの兄妹愛を強く感じたときに、チャップリンのこの言葉を思いだしたからである。

この物語は角川文庫の『ああ野麦峠』(*13: pp23-25)に書かれている実話である。映画にもなった。特に印象的であったのは、貧しい家を助けるために工女となっていた・妹のミネが病気になり・死にそうになったにもかかわらず、工場は彼女にかまわなかった。そこで、兄・辰二郎がミネを家につれて帰るために、ミネを背負って何日も歩き続け、何山も越えていった場面に強い兄妹愛をみたことである。

実際に、私も行って野麦峠を見たが、高さ(1672m)からいって普通ではこの峠^{とうげ}を人を背負って歩くなど考えられないことだと思った。このとき「美は悲しみの中にあり」という言葉を痛感した。(後期英会話教材『旅に心を求めて』3章で教材化しているので参照してもらいたい)。

英語の勉強の基本とは人を引きつける英文を読むことであり、そしてそれを通して自分を表現することではないかと思っている。だから、チャップリンのこの言葉を集めることは私の義務ではないかと思っている。もっとも、英文を入手してみないと、私の関心は満たしても授業で使用できるかどうかは分からない。教材集めとはそうしたものではないかと思う。

チャップリンは私に二つの課題を残した。一つはこの「美は悲しみの中にあり」に関する一群の英文探しと、もう一つはチャップリンとの出会いの中で述べた視聴覚教材をどう取り扱うかという問題である。

では、こうした89年からの課題を何故未だに達成していないのかと言えば、9章で少し述べた如く、

短大の教壇がまともに授業するような“場”ではなくなったからである。

《◇-3：短大2期[1988～1989年]を振り返って》

87年度以前は、駿台での超多忙さと、短大において授業に多くのものを要求されておらず、余り授業に責任を負わされていないと感じていた。それに、「英語の授業とは何か」がわからず、私の社会科の授業などに比べれば授業と言えるようなものを短大においてはしてこなかった。これらは既に何度も記した通りである。

88年度から英語の授業にもかなり取り組み始め、さらに89年度からは第9章キング牧師の箇所ですで書いたように英語の授業も求める日々が始まった。そして、(この89年に)英文解釈の教材としてキング牧師を、視聴覚教材の出発点としてチャップリンの教材を最初に作成したことも既に記した通りである。特に、視聴覚教材に至っては教材作成のためビデオデッキ2台を揃えたばかりではなく、英文の字幕のでるデッキさえも購入した。この器械は、アメリカの耳の聞こえない人用に書かれた英語の字幕が出るビデオの(普通は見えない)文字を出す器械である。

しかし、これらの教材は9章で触れたSNOWMANの教材についての如く、全て大きな限界に突き当たる。9章ですで書いた実質的に授業の場が全くなくなったことである。89年度になり突如かなりの学生が授業中に喋ったり、中には常識では考えられない(大学の語学等少人数クラスで)平然とマンガを読んだりするという、正気かと疑う学生が出現した。

この学生は、授業中当てられても無視しマンガを読み続け、幾ら注意しても無視し平然とマンガを読み続けていた。当然排除し、単位を与えない予定でいたが、名前をメモした紙を紛失するという失態のため、この学生がその後どうなったかは分からない。ましてや、この年は生徒との間の意志疎通をはかるため、自己紹介時には私の短大月給の約1箇月分を使い、食べ物や飲物を私自身で用意し茶話会をしていた。その後も和気藹々と授業をしようとし始めた年であった。

尚、その年以後は自己紹介のときに私の金を使って何かを買うことなどは当然する訳がない。こうした私の金を使い茶話会などをして、生徒との意志疎通をはかることは、過去駿台でも岡山の予備校でも何度かしており、それにより授業は当然より効果的になったことは言うまでもない。この生徒の行動は超異常な現象で、この生徒の気が狂っていたと言われなければ理解できない行動であった。大学のゼミで発表の生徒が平然とマンガを読み、注意されても無視しマンガを読み続けるという姿を想像すれば良い。

気が狂っていなければ何であろうか。語学等の少人数の授業はゼミと同様である。実際、最高学府の大学で20人くらいの語学の時間に、当てられた生徒が発表を無視し、注意されても無視し、平然とマンガを読み続けている姿を想像すればよい。

こうした、88年度まで全く見られなかった支離滅裂な状態が生ずる。そして、私が問題にしているのはこのような目立つ態度ばかりでなく、はっきりと聞く意志を持たない、若しくはまともには聞かない(要するに試すような形でしか聞かない)という学生の意思表示に近い雰囲気を感じたことである。

これにより、少なくとも「SNOWMAN」の如く温かいとか純粋な汚れのない教材をまともにぶつけていくことは不可能になった。だから、Snowmanのプリントはつくっても配布どころか印刷すらしなかった。しかし、それでも「SNOWMAN」型ではない授業はできるかもしれないと考え、「野麦峠」を始

め幾つかをプリントで配布した。

しかし、それもやがて限界になる。私語がうるさくなると、授業中何回も怒鳴らなければならない。するとリズムも狂えば、怒りながら「野麦峠」の如く“兄妹愛”の話などできる訳がない。ましてや、私の声が十分届かないのでは私が話すことすらできないというか、まともに話す気が次第に消えていった。こうした理由で、チャップリンを始めとする視聴覚教材も大きな限界を迎えたのである。その後、普通の教師並の授業をしても、私がそれに対しての罪悪感等の苦痛を感じる必要は何一つないと考え、そうすることにした。

※注：本当はこうした現在の学校に見られる授業をすることは、私に言わせれば犯罪なのであるが、私の場合はその責任はもはや私にはない。とりわけ言えることは、**大学は最高学府であり、勉強をする所である**。勉強をする気がないのなら辞めた方が本人も含め全ての人のためになる。大学を中退しても誰も非行少年（少女）とは思いはしない。まして、大学生の年齢は少年ではなく、（外国で言えば）成人、公民なのであるから（日本でも実質的には同じである）。少なくとも、授業という場において社会常識が守れないならば来る資格はないし、他の人の権利をも侵害し、学校の評価自体にとっても大きなマイナスとなるであろう。**学校の評価は基本的に学生と卒業生が作るものであるから**。詳細はこの『求め続けて』【付録－1】の「学校」の項参照。

だが、授業がいわば生き甲斐であり、それ以上に第Ⅰ部、第Ⅱ部を書いたように十分な授業ができずに苦しみ続けてきた以上、駿台を辞めて時間ができたこの時に何もしないはずがない。今の内に授業の蓄積（貯金）をしておかないと、再び忙しくなったときに、あの昔の苦しみをまた味わわなければならないという、その思いがどのようなことがあっても授業の準備へと駆り立てていった。勿論、本能的に余程のことがない限り授業を求め続けていく体質でもある。

そして、この年（89年）後期からは英会話の授業が始まった。まず、このままいけば、授業中、私の話は学生には聞こえにくいし、少なくとも学生に発表させても誰にも聞こえないであろう。このような場でも最低限の責任は果たさなければならない。そうした形の授業の準備をしなければならない。**そこで、ほとんど喋らない英会話の授業というものを考えに、考え続けた。そこから生まれたのが『DOROTHYと10人の出会い』と『DUMBO』の教材に見られる発想である**（94年以降の同一教材と内容は少し異なるが）。

だから、これらの教材は常識を逸脱する、教師も含め“しゃべらなくても良い英会話”の授業として考えついたものである。ただし、『DOROTHYと10人の出会い』の第1話から2話の頃までは比較的ましな内容であったし、解説にFIELD WORKの文を載せる発想も思いついたが、この年（89年）11月の入院を契機に病的に気力が失せ、第3話あたりから初版の『DOROTHYと10人の出会い』等は内容のない教材となってしまった。

※ **喋らない英会話**とは以下の内容であった。

①プリント簡易版「会話体系」（半年分でB4用紙わずか約7枚）をごく簡単に解説する（数分くらい）。

②物語風に作成した、日英文混合文の「Dorothyと10人の出会い」（現在と違い、極端に易しくかつ短いもので、解答欄を除くと半年分でわずか12ページしかないもの）を生徒が①「会話体系」をヒントにして日本語部分を英語に直し、それを英語で板書させ時間を潰し、次に私がそれへの訂正を簡単にし、それを生徒に写さず作業をし時間を潰す。

①最後に、英語発音に慣れさせるため視聴覚教材を流し、喋るのは実質①「会話体系」のわずかな時間のみとした。板書の訂正などは教師が講義しているのではなく、単なる作業にすぎず、しかもそれとて極端に短くした。①「会

話体系」のヒントを与えているので、実際に特に話す必要もなく板書を写させるという作業のみで時間潰しが出来たということである)。

現在は、逆に②「Dorothyと10人の出会い」は完全英文化し、①「会話体系」と結合してA教材とした。これを参照にB教材『旅に心を求めて』DIALOGUEの問題を解答させる形としており、当時とは内容は異なっている。

だが、DOROTHY等思いついたのも、旅(をテーマとした)教材を漠然と思いつき始めたのも、今日のA教材とB教材の組合せを思いついたのも、実は、喋らず英会話を教えるという構想の産物であった(現在は当時とは全く違う形となっているが)。尚、このとき思いつきかけた「旅(をテーマにした)」教材は、当時授業にならないため発展できず、94年以降に『旅に心を求めて』として姿を現してくる。

同時に、このころ思いついた「発音教材」{ビジュアルかつセサミストリート(Sesame Street)などアニメビデオとの組合せ}は、当時やりかけたものの授業の場が事実上存在せず、お蔵入りしており、本年97年度頃から本当に徐々にではあるが、わずかながらどこかで姿を見せ始めることになるかもしれない。さらに、この頃思いついた「SNOWMAN」型優しい・温かい教材他、その他の教材群も当時すべて断念してしまい、それらのアイデアもそろそろ教材として出す時期が近づきつつあるのかもしれない。尚、当時の生々しい話などは、5年後以降の『求め続けて』新版を作成する際に触れることとする。(1997年1月記す)。

2007年追記をすれば、喋らない英語・英会話という発想はIT時代を迎え、さらに完璧な形でアイデアを持っている。機密のため公開はできない。

〈▽休眠期[1990～1993年末]について〉

その後、90年初頭から93年末まで第Ⅲ部の最初に記した時期区分の如く、病的に気力が失せる休眠期を迎え、この間の授業のことはほとんど記憶にない。

ただ学校に来るだけの日々を迎える。それでは、授業への意欲はといえば、この間の河合塾及び岡山学院などの教壇で昔とは質の異なる極度の苦痛となってあらわれる。ただ、不思議なことに超騒がしかったこの短大の教壇ではほとんど苦痛らしきものは感じもしなかったことは事実である。

そして、河合塾での授業後の私への拍手が一番苦痛であったことも事実である。尚、本能か何か知らぬが、この休眠期ですら授業とかけ離れた所で幾つかの授業の材料及びヒントを得る。いつか授業化する黒澤明氏の映画作品、また「男はつらいよ」の全作品を再度通して見たのもこの休眠期であった。横井庄一氏の教材化のきっかけを得たのもこの期のことである。

さらに、短大後期教材の『旅に心を求めて』の中の「短大からの道」や「短大への道」のきっかけとなったのもこの休眠期である。特に「短大からの道」は気力のない時期のことだからこそ後に作品化できた。ただし、それでも普通の教師の授業と同一の責任は果たしていた。しかし、後に書くように、それでは教師の良心にとって犯罪なのである。

だが、(報酬前提での職業としての「授業」・「演出」の)場がない以上もはや私の責任ではない。

尚、95年度1年間の教材のほとんどすべては、何ものなければ91年頃には作成していたものである。そうしたことも含め、今——短大3期[93年末]以降——授業について何を考えているかなどは11章へレンケラーの箇所及び補章一3で述べることにする。

『求め続けて』に所収している【付録一1】「学校」も参照のこと。

(2021年12月7日追記) : 現時点で思いついたことを記載 (補章に回すか検討中である。)

どこに配列するか検討中のため、暫くは、『求め続けて』関連のHPに直に掲載し、後に、PDFで適切な箇所に配置をする。HP掲載は2021年12月16日を予定している。

内容のごく一部だけを抜粋しておく。

①部外者の不法侵入及びお金で買収された人物群による業務妨害被害の可能性が高いこと。

…駿台講師時代に暗躍したXが偽学生か、一部の学生をお金で買収したのであろう。…簡単に言えば、部外者の投入の確率が高い。

②職員の一部がX類に買収か、脅迫されて、私に労基法違反・契約違反・その他の危害を故意に加えた疑惑がある。

……

③休眠期を、医学的に考えると、極度のうつ病の可能性が高い。正確には躁鬱病そううつの可能性が高い。

1990年代のソ連崩壊やドイツの壁崩壊もほとんど知らないの……

……

④私が英語ができるか。

……

⑤(後日のテーマ) チャップリンやアンサリバンは中学校頃まで英語の読み書きができなかった。それでは彼や彼女に見事な英文を書くようにしたのは何であろうか。少なくとも学校ではなかった。

……

⑥(後日のテーマ) チャップリンが義兄弟と仲がよかった大きな理由は何であろうか。「美は悲しみの中にあり」と関係しているだろうか。

……

⑦1998年度でポリテクカレッジ岡山を辞職させられ、教壇から離れ、開業妨害三昧さんまいの日々。

……、妨害がなければNHK等のハイビジョン放送を凌駕りょうがする作品作製の潜在能力はある。

……

⑧私の本来のテーマはプレゼンテーション屋であるが……。

……

⑨「旅に心を求めて」シリーズとは何か。

このシリーズは、「金持ちは本当に幸せか」を何人かの人を選んで、その人の生きた道を振り返るシリーズであった。もし、「金持ちになることが本当の幸せではない」ならば、……

……

⑩最近の情勢。

『日本のフィクサーME』と『閉じた窓にも日は昇る』(駿台時代の業務妨害被害・能開大での違……2012年以降、一連の危害(1984年からの被害・1983年からの工作開始)はひと間違ちがいが原因と臭わされている。

……

⑪詐欺疑惑。

同時に、能開大などが、当初から、学校群のCM目的で専任確約詐欺を行った疑惑である。駿台もその側面からの検討も必要である。私の裏の知名度活用のための詐欺や各種業務妨害被害である。